

聖書:列王記第二11章13~21節

説教:平穏となる

はじめに

いつものように前回までのあらすじを振り返ります。いまからおよそ二千八百年前、エフーは預言者エリシャのことばに従って、北イスラエルの王であったヨラムとその母イゼベルを倒し、南ユダの王であったアハズヤも倒します。アハズヤの母であったアタルヤは、息子に代わってただちに女王となったのですが、そのとき、自分の孫たちちのいのちを奪うという尋常では考えられないことをしてしまう。どうしてそんなことをするのか。息子と自分の一族を滅ぼしたエフーへの復讐のためと考えられる。主はかつてダビデに対し、あなたの子孫から救い主が出ると語りました。信仰者であったエフーはそれを堅く信じています。その確信を粉々に打ち砕くことができれば、エフーに大打撃を与えることができる。そのためにどうするか。アタルヤの孫たちこそダビデの血筋に連なっているのです。その孫たちのいのちを絶てば目的を達成できる。なんとも恐ろしい発想ですが、アタルヤは躊躇することなくこれを実行する。ところがそのとき、アタルヤの娘エホシェバが母親のことで心を痛め、甥に当たるヨアシュをこっそりと連れ出して六年間主の宮に隠して育てていった。それが前回までのあらすじでした。

今日の所では、七歳になったヨアシュが人々の前に出て南ユダ王国の八代目の王の座に着き、町は平穏になったとあります。私たちも「平穏に暮らしたい」というように気軽にこのことばを使います。では、真の平穏とは何であるのか。ともに考えてまいります。

1 アタルヤ女王の支配

1) 正義はどこに行ったのか

アタルヤが国を治めていた六年の間、どんな状態だったのか。救いということに関して言えば、二つの危機がこの国を覆っていたと思います。一つ目。祖母が孫を殺すという獣にも劣るようなことを国のトップの座にある者がしたのです。人としてはいけな最低限のことさえないがしろにされていく。神の正義はどこに行ってしまったのか。だれもが嘆いた。もちろん女王に対して言いたことがたくさんある。しかし偽りのことばがあたかも真実であるかのように語られ、脅迫によって人々の

口は封じられていき、人々は霊的にしおれてしまいます。これが一つ目の危機です。

2) 神の約束はどこに行ったのか

二つ目。人々は、主がダビデに語ってくださった約束のことを堅く信じてきました。アタルヤ女王の孫たちがダビデの血を受け継いでいます。あの子孫から救い主が来られるはずであると信じて、望みをかけていた。ところがその孫たちが全員惨殺されてしまった。行方知れずのヨアシュもおそらく殺されたはず。もはやイスラエルに救い主が来ない。主のみことばがまるで煙のように、不確かなものに感じられて、主への信頼が揺らいでいった。これが二つ目の危機です。

2 ヨアシュ王

1) 人々は喜んだ

そんな状態が六年も続き、どこにも希望の光が見えない、まるで闇のように感じられた時、思いがけないことが起こります。祭司エホヤダが、死んだと思われていたヨアシュを主の宮から連れ出し、王冠をかぶらせ、さとしの書を渡し、油を注いで王として宣言します。これを見た人々は、手をたたいて「王様万歳」と叫びます。

日本の政治と比べてしまいます。岸田首相は、「今日よりも明日はもっとよくなる政治」と言ったそうですが、このことばに期待をかける人はほとんどいないし、大臣が新しくなったから「万歳」と言う人もいない。非常に冷めています。

しかしユダの人々は熱かった。アタルヤがやったことがあまりにもひどかったので、その反動で大きな期待をかけ、「王様万歳」と叫んだということはあるでしょう。でも、それだけだったのでしょうか。

2) 王宮への出入り口

この疑問は、王宮の出入り口の話とも関連してきます。ヨアシュが王となったとき、主の宮のところでアタルヤが逮捕され、馬の出入り口を通過して王宮に連れて行かれ、そこで処刑されます。王宮に連行され、処刑されます。馬の出入り口を通過するので、これは人間扱いではない。アタルヤのしたことはそれほどのことだったということです。いっぽう、ヨアシュは近衛兵の門を通過して王宮に入

り、王の座に座ります。たとえ七歳の子どもであっても、ユダ王国の王としての権威にふさわしくふるまうために、正式な門を通った。そう考えられる。でも、もしそれだけのことだったというのなら、聖書にわざわざ記す必要はないはずです。いつも言いますが、聖書は罪人である私たちを救うために書かれた神のみことばです。どんなことばも救いに関係があるから書かれているはず。ならば、ヨアシュが近衛兵の門を通って王宮に入ったことにも何か大切な意味があるのではないか。このことは、人々が「王様万歳」と叫んだこととも関係があるのではないか。

3) 契約を結ぶ

そのことはまた後で考えることにして、17節を読みます。「エホヤダは、主と、王および民との間で、彼らが主の民となるという契約を結ばせ、王と民との間でも契約を結ばせた。」

日本では首相が交代しようが、天皇が代替わりしようが国民がそれで何かをするということはありません。なにもしません。ところが祭司エホヤダは、ヨアシュを王の座に着かせると、まず契約を結ぶということをしらせる。それは二種類があって、一つ目は「主と、王および民との間」。二つ目は「王と民との間」。この二種類。どうしてこのように手の込んだことをするのかと思うでしょう。

それは、民たちがいままで何をしてきたのかと大きく関わります。アタルヤ女王の命令であったとは言え、人々は異教の神々バアルを礼拝してきたのです。それがどれほど盛んに行われたかがわかるエピソードがあります。ヨアシュは六年間、主の宮に隠れていました。それがどうして見つからなかったのか。不思議に思いませんか。大勢の人々が主の宮に来て礼拝していたのなら、必ずだれかが見つけてアタルヤに密告していたはず。ところが六年も隠し通せた。理由は簡単。主の宮に人が来なかったからです。人々はみなバアルの神殿に行っていた。

モーセの十戒の最初の二番目はこうある。「あなたには、わたし以外に、ほかの神々があつてはならない。」「偶像を造ってはならない。それを拜んではならない。それらに仕えてはならない。」人々はこの律法に違反し、罪を犯してきました。そのことをうやむやにして、今日からは主の宮で礼拝しますとはならない。その前に、神の前にもう一度立たなければならぬ。それも、国民だけではなく、王も国民も一緒に出て行く。そう

やって主ともう一度契約を結んでいく。それは、自分が神の前に罪ある者であることを認め、主の赦しをいただき、主に立ち返ることを意味していく。そのことを王と国民が同じ所に立って行う。そこからスタートする。そうするとどうなるか。王がまず主の前に立って契約を結んだのです。そうすると王はもはや自分勝手なことはできない。王は神のみこころに沿って政治をおこない、国を治めることを誓う。そのことが二つ目の王と民との間に交わされる契約のことです。

こうして神のみことばに立ち戻る決意をした民たちは、ただちにバアルの神殿に走り、徹底的に破壊し、バアルの祭司も倒します。

3 民衆

1) 町は平穏となった

その結果どうなったか。20節。「民衆はみな喜んだ。アタルヤは王宮で剣で殺され、この町は平穏となった。」

平穏ということばですが、最初にも触れたように私たちが日常的に使っています。同じことばだから同じ意味とは限らない。聖書ではどんな意味なのかをきちんと確認したいと思います。こんなとき、反対のことを考えるとわかりやすいでしょう。アタルヤが国を治めていた時、人々の心は当然穏やかではありませんでした。正義がねじ曲げられ、嘘と偽りがまかりとおりに、脅迫、密告は毎日のこと。常に本心を押し隠し、うわべでは「私はあなたの友人です」と言いながら、心の中では舌をペロツと出す。そんな表と裏とを使いわけて生きていく。私たちが置かれているこの世も同じ。例えば、まるで頭の上に重しが載せられているかのようです。ですから、平穏とはこの重しが取り除かれて、霊的にも解放されたときに感じる感覚と言ってもいいかもしれない。でも、もう少し具体的にはどういうことだったのか。

2) 主のみことばは必ず成し遂げられる

そこでわきに置いていた問題に戻ります。人々はヨアシュ王を見たとき、なぜすぐに喜んで迎えたのか。アタルヤは馬の出入り口を通ったのに、ヨアシュは近衛兵の門を通って王宮に入った、とわざわざ書いてあるはどうか。この二つの事です。

ヒントは12節の最初にあります。「エホヤダは王の子を連れ出した。」王とはだれか。直接にはエフーに倒されたアハズヤを指す。そのアハズヤはだれの血筋でしょうか。ダビデの血筋です。ということは、「王の子」は「ダビデにつながる子」と

いう意味にもなります。つまりこういうことです。アタルヤが孫たちのいのちを奪った時、人々は嘆いた。主がダビデに語られたあの約束は、ここで絶たれてしまった。もはや自分たちには望みはない。主の救うことができないと思って落胆してしまった。ところがヨアシュは生きていた。まるで死んだ者がよみがえったかのように人々には見えただけ。そこで人々ははっきりと悟った。主のみことばは煙のようにはかないものではなかった。主のみことばは確かだ、一度語られたならば、主のみことばはどんなことがあっても必ず成し遂げられていく。ダビデに語られたあの約束は真実であった。ほんとうに主は生きておられる。それを知って、人々は手をたたき、ラッパを吹き鳴らして喜んだ。近衛兵の門を通過して王宮に入る資格があるのはだれか。神が約束された救い主につながる「王の子」ヨアシュしかいない。いまそのヨシュアが王宮に入る。そのことをはっきりと目を見たとき、人々は、主のみことばの確かさを知り、初めて静かな心に戻ることができた。主が与えてくださる「平穩」とはこのことです。

私達も平穩に生活したいと願っています。これがあれば平穩になれる。あれをしたなら平穩になる。世には「これが平穩ですよ」と言って目を惑わすものがあふれています。しかし、私達はすでに知っています。答えは一つしかない。主の確かな救いの約束だけが私達を本当の平穩へと導いてくださるということ。主の御名をあがめます。